論説

富士山と日本陸軍の少年兵養成
――陸軍少年戦車兵学校小考――

松本武彦

目次

はじめに
一　先行研究・史料
二　少戦校の創設から終焉
三　兵士としての少年戦車兵
1. 志願と採用
2. 入校試験
3. 待遇
四　少戦校の教育活動
1. 期間・組織・内容
2. 戦争末期

3. 生徒の殉職
4. 西富士演習場
五　少戦校の宣伝活動
1. 宣伝による生徒募集
2. 軍神
3. 映画
4. 「少国民総決起大会」
六　少戦校の活動と富士山
1. 設立・募集・入校
2. 訓練
3. 富士登山
七　卒業後
1. 戦地へ
2. 船舶部
おわりに――敗戦と閉校

はじめに

日中戦争以降の中国大陸や太平洋、東南アジアの戦線での日本軍の主力戦車は、九七式中戦車と呼ばれた、乗員四名（戦車長、砲手、操縦手、機関手）のディーゼルエンジン車だった。昭和十年頃（一説に昭和十一年）開発が

始まり、昭和十三年頃（一説に昭和十二年試作車竣工）完成し、皇紀二五九七年に制式化されたので、九七式とされた。秘匿名称では「チハ車」と呼ばれたが、「チ」は中戦車、「ハ」は同型のうち「イロハ」即ち三番目に設計されたものであることを示していた。最高速度時速三八キロメートル、超濠能力二・五メートル、徒渉水深一・〇メートル、航続距離二一〇キロメートルという能力を備え、昭和十七年までに東京製作所（三菱重工業）において、車体一二二四輌、機関一六一〇台、昭和十五年二月から十八年十一月までに日立製作所亀有工場において三五五輌（一説に二七九輌）が生産されたほか、相模造兵廠等でも生産された、という。エンジンは空冷式ディーゼルエンジン一七〇馬力で、前輪駆動だった。兵装は五七ミリ砲一門、七・七ミリ重機関銃二（砲塔後部および車体左前面）で、後に高初速の一式四七ミリ戦車砲が搭載されたのが、九七式中戦車改である。装甲は実戦において種々改良や増強がなされ、一部の車体で五〇ミリになった。その結果、重量は当初一三・五トンであったが、最終的には一五・三トンに達した。昭和九年頃で制作費はトンあたり約一万円とされていたから、九七式の一輌あたりの制作費は約一五万円とすることができる。[1]

本稿が考察の対象とする陸軍少年戦車兵学校（以下、「少戦校」と略記）においても、実習に使われたのは、一二気筒、一七〇馬力、軽油ディーゼルエンジンの九七式中戦車だった。[2]

日本における戦車部隊の歴史は、大正十四年、久留米に第一戦車隊が創設されたことに始まる。同部隊は、昭和八年戦車第一聯隊となる。久留米での戦車隊創設と同年、千葉歩兵学校に第二戦車隊が置かれ、同部隊が昭和八年に戦車第二聯隊となった。以降、昭和八年、久留米の戦車第三聯隊から昭和二十年七月、独立戦車第九旅団隷下に編成された戦車第五十二聯隊まで、四〇を超える戦車聯隊が編成され、中国大陸やフィリピン、タイ、マレー半島、

サイパン、ラバウル等に「陸戦の華形」[3]として出動、転戦した[4]。

以上の部隊に対し、戦車戦に特化した戦術や機械工学などの基礎を身につけた下士官を供給する学校として当初は千葉の戦車学校内に、さらに移転して富士山西麓に設けられたのが、少戦校であった。この学校の沿革、設立の背景、教育内容、学生の特質などについて明らかにするとともに、それらと大多数の生徒がその自然環境の下で活動した富士山との関連について考察しようというのが、小文の目的である。

一　先行研究・史料

少戦校そのものに関する専論は必ずしも充実しているとは言えない。少戦校の生徒が、多くは高等小学校卒業か中学校、実業学校、青年学校在学中の十代なかばから後半の若者、というよりまだあどけないごく少数の少年達であったからで、少年飛行兵などとあわせていわゆる少年兵全体の考察のなかで言及されてきたにすぎない。

そうしたなか、高野邦夫は陸軍の少年兵の生成と展開に関して、大部分はアジア太平洋戦争の始まりとその進展・拡大に対応したものであり、兵器の精密化のため早期の専門的知識・技術を身につける必要があったからである、とし、徴兵よりも早期に軍人としての教育に接し得ることが、少年達が少年兵養成の各種の学校を選択する理由となっていた、と指摘している[5]。

また、安田武は、それほど単純では無いかもしれないとしつつも、制服や七つボタン、純白の絹のマフラーなど外見にあこがれて多くの少年兵が死地へ向かったのではないかとしている[6]。以上の指摘は先駆的なものとして貴重

だが、こうした指摘と同時に、彼らの置かれた経済的、社会的環境にも関心を向ける必要があるのではないだろうか。

少年兵研究のなかで、少戦校に比較的まとまった言及をおこなっているのは、奥村芳太郎であるが、事実問題の指摘が中心である[7]。

さらに逸見勝亮は、少戦校の生徒募集のあり方を検討するなかで、軍は直接小学校などへ出むいて宣伝・勧誘したが、そのほうが効果があったと認識していた、としている[8]。

また、加登川幸太郎は日本陸軍における機甲部隊の整備に関して、その契機をノモンハン戦とドイツの電撃戦に求め、ただしそれらによって着手された機甲戦備の充実は二年にして頓挫した、と指摘している[9]。

地域史研究の中で、少戦校にまとまって触れているのが、『富士宮市史』である。設立経過や背景などのほか、地域が少戦校に対してどのような対応をおこなったかについては、「反対も多少あったようである」と述べている[10]。

少戦校における植民地出身少年兵、特に朝鮮人少年兵の問題を明らかにしているのが、北原道子である。日本による植民地支配の下で少戦校を志願した朝鮮人少年達の「悔悟」「無念」を指摘し、その背景としての当時の日本社会における朝鮮人差別の存在に注目している[11]。

以上の研究を通覧すれば明らかになるが、少戦校に関する研究や史料は決して十分ではない。従って、上述の北原の論考のように、少戦校出身者への聞き取りをおこなうなどして、史料が少ないという隘路を切り開く努力が必要だが、本稿でも、後掲のように少戦校出身者への聞き取りをおこなっている。

ほぼ唯一と言ってよい原史料として、『陸軍少年戦車兵学校状況説明資料　昭和二十年九月五日』がある。防衛

省防衛研究所図書館が所蔵する。少戦校の校史というべき部分と昭和二十年九月つまり少戦校が機能を停止した時点の状況を説明・報告した部分とからなる。

少戦校出身者および旧教官によって構成される若獅子会の機関紙『若獅子』は一九六六年に創刊され、二〇一一年に五〇号で停刊した。少なくとも二〇年の歳月を経て刊行されたものであるから、その記述内容は歳月による記憶の劣化を蒙っている可能性が大であり、その意味では近年なされた聞き取り調査の内容が持つ資料としての限界と同様の限界を持っているが、おおむね年一回刊行された『若獅子』に蓄積された回想や記憶によって再構成された史料は、重層的に使用することで、十分に少戦校史研究の用途に耐えうるものと考えられる。

二　少戦校の創設から終焉

少戦校開設の背景や経緯、開設後の教育等の展開、施設設備の概要は以下のとおりである。

少年戦車兵制度および少戦校の創設には、その背景としていくつかの点が指摘されている。のち、少戦校初代校長となる玉田美郎は、一九三九（昭和十四）年のノモンハン事件がその後の戦車関係施策に影響し、戦車聯隊の増設と主として中国東北部への配備や戦車隊下級幹部、中堅の養成すなわち少年戦車兵制度の設置につながったとしている。[12] 玉田自身が、戦車第四聯隊を率いてノモンハンでの戦車戦に参加し、九日間の戦闘で戦車の三分の一を失い、八〇数名が戦死した[13]という体験を持っている。

しかし、部隊の機甲化など近代装備の急速な充足が、日中戦争の拡大と欧米各国との国力の差により[14]、十分にお

こなえなかったため、これを補うためには「兵員とくに幹部の資質を向上し、一騎当千の強者を養成するの外なし」となった。[15] 玉田は、昭和十一年、第七師団司令部附、陸軍戦車学校教官、昭和十五年、公主嶺学校戦車教導隊長をつとめたのち、昭和十六年、陸軍少将として千葉戦車学校附、少戦校校長となる。[16] 上層部も本人も第一線部隊の指揮官としての、ノモンハンの戦訓を何とかして生かそうとしたものと言えよう。

少戦校の前身は昭和十一年八月に千葉市黒砂で設立された陸軍戦車学校内に、昭和十四年七月十四日の勅令第四八五号に基づいて、昭和十四年十二月一日生徒隊として設置され、[17] 昭和十六年十一月二十八日の勅令第一〇一五号により、同年十二月一日、初代校長玉田美郎のもとで少戦校の開設となった。[18] その任務は、「戦車関係ノ現役兵科下士官タルコトヲ志願シ召募試験ニ合格シタル者ヲ以テ生徒トシ戦車関係現役下士官ニ必要ナル教育ヲ実施」し、加えて「予備役下士官タルベキ特別幹部候補生ノ教育ヲ実施ス」とされた。[19]

昭和十四年十二月一日、第一期の生徒一五〇名が入校し、彼らは昭和十六年七月第一回卒業生として各戦車部隊に「配付」された。[20]

そうしたなか、戦車学校生徒隊が所在した千葉市周辺は、都市化が進みまた多数の部隊が駐在して、少年兵教育に不備な点も現れたため、少戦校設立委員会が戦車学校校長などによって結成され、戦車学校における学術研究ならびに既成幹部の練成教育と生徒教育の分離をはかって、生徒隊の新天地への分離独立が計画された。[21] その時期はおおむね昭和十六年後半頃で十一月には近衛師団主計大尉が大宮町をおとずれ御料地拝借権を一万円で買収し、当該地内の二七戸の移転が進められている。[22] 少戦校の転営場所は、富士山の西麓、静岡県富士郡上井出（現　富士宮市上井出）で、この地が選定されたのは、北隣に西富士演習場が存在し、当時の満洲に似た地形が存在することや

「霊峰富士を間近く仰」ぐ場所であったこと、現地の協力があったこと、鎌倉時代以来尚武の地であったことなど[23]からである。

昭和十七年二月頃、戦車要員充足のため歩兵科からの転科教育をおこなう戦車補備教育が千葉戦車学校において実施されることとなり、当初、少戦校は西富士演習場へ転営せよとの内示があり、廠舎の視察などがおこなわれたが、施設が狭隘のうえ寒冷地であることなどのため中止となるなどのことを経て、昭和十七年七月十六日、上井出の新校舎に先遣隊が転営を開始し、職員や全生徒の移転が完了したのは八月一日だった[24]。

同年十一月十日、少戦校の名称での第一回卒業式が執行された。卒業生は、千葉戦車学校生徒隊に第二期生として入隊した少年達だった[25]。

昭和十八年六月、生徒が「尽忠報国の志」を誓うため、敷地内に若桜神社が建立された[26]。同年には、相馬御風作詞による校歌も制定されている[27]。歌詞の内容に関しては、後に触れる。

昭和十九年三月十三日、玉田校長が転出して、第二代校長として立古睦吉大佐が、昭和二十年八月一日には、第三代校長、木川田康夫大佐が着任[28]している。

昭和十九年六月ないし七月に、皇太子の少戦校見学が予定されたが中止となり、さらに教官らが連合国軍の本土上陸を予期して、「富士戦車聯隊」を組織し駿河湾からの米軍上陸に備えるといったことが起こった[29]ともされる。

昭和二十年に入ると、少戦校も米軍機による銃爆撃をうけることとなった。前年後半ごろから、少戦校では毎日のように防空壕建設作業がおこなわれていたなかで、三月、グラマン機によって機銃掃射をうけ、七月には複数機による攻撃で、生徒食堂附近で一人が死亡、二人が負傷する人的損害も生じた[30]。車廠で砲塔に砲身を装備した上で、

少戦校周辺の林のなかの掩体壕に戦車を移動したり、車載の銃で戦闘機に反撃したこともあったという。[31]

昭和二十年八月、日本はポツダム宣言の受諾を表明。少戦校も一部を残して少年兵は復員。上級の教育総監部から「呼び返せ」と指示される一幕もあったというが、結局、職員のみで残務整理を行い、十月、進駐軍接収委員に引渡しがなされた。たびたび史料として引用している『陸軍少年戦車兵学校状況説明資料　昭和二十年九月五日』は、接収に備えてまとめられたものであろう。これによれば残余の兵器は中戦車六四輌、そのうち二〇輌は砲塔を修理中、軽戦車七二輌、指揮官車二台、戦車砲一〇〇門以上、などとなっていた。[32]

北東方に富士山、西に上井出の集落をひかえる全体で面積約一〇〇万平方メートルの地が名古屋師団経理部によって整備され、最長部で東西約五〇〇メートル、南北約一〇〇〇メートルのやや歪んだ長方形の用地のなかに学校本部、生徒舎、実習講堂、車廠、材料廠、食堂、医務室等が置かれた学校敷地、加えて水道貯水池、校前練兵場、やや離れて西方に上井出陸軍病院などが点在し、[33] 土地買収費用などを含め約六五〇万円を投じて整備され、年間経費約三〇〇万円、生徒一人あたり約一二〇〇円を費消した[34]少年兵の学び舎は、戦後一部の痕跡を残すのみとなった。[35]

以上の如き軍施設の受け入れ先となった上井出村や大宮町は、これに如何に対応しただろうか。既に見たように『富士宮市史』には「協力的」だったとあり、昭和十四年頃に少戦校が移転する計画が提起された当初は、地元地主約一〇〇名ほどは異論なく受け入れることを表明したとされているが、[36] その実態は如何だっただろうか。軍の施設が移転してくるのであるから、当然、当時の一般的な社会的風潮のなかでは、拒否という対応はありえないが、受け入れがいわば誘致のようなかたちで積極的におこなわれたかという観点からは、否定的に考えざるをえない。戦後にまとめられた西富士地域のある開拓地の歴史書では、土地買収が「強制された」としているし、[37]『富士宮市

史』も他の記述箇所では「反対も多少あったようである」と記述しているだけ[38]でなく、その具体的様相について、「軍部による威圧的措置」による対象地域の民家移転や耕地の閉鎖などもあり、土地を失った住民は近隣の村や大宮町へ転居するか、昭和十八年頃からは少戦校の雇員となり現金収入を得るものもいたが、食糧難の時期でもありしだいに農業に従事するようになった、としている[39]。

さらに、少戦校転営後は、昭和十八年八月地元の国民学校の人穴分教場が強制疎開で閉校となり、上井出校に移転を余儀なくされた[40]。周辺の道路は、実弾射撃のたびに国道一三九号線（富士宮―山梨線）が通行止めになったり、戦車が通行すると道路が壊れたり、住民に説明無しに道路の拡張や新設がおこなわれたりした[41]。しかし一方で、少戦校生徒と地域住民が協同してイノシシやキジ・野ウサギなどの狩猟が計画されることもあった[42]。

三　兵士としての少年戦車兵

1．志願と採用

少戦校志願者の階層的特色は、まとまった調査が現存しないので不明確と言わざるを得ず、これを明らかにするには一部の当事者の回想などによるほか無い。たとえば愛媛県新居浜出身のCは、父親が土建会社勤務で、村会議員を務めたこともあり、いささかの農地をもっていたが、その耕作はもっぱら母親の仕事で、本人は母親の手伝いをしつつ、地元工業学校の電気科にすすんだ[43]。「裕福などとはお世辞にも言えない」家庭だった[44]。三期生で山口県

の農家出身のSは、青年学校に在籍していたが、通学は二日に一回で、農業実習や教練をおこなっていた。[45] 青年学校在籍中に少戦校に転じた者には、他にも、後出の三期生で宮崎県出身のYがおり、同じく三期生の山口県出身Sも同様だった。[46] 二期生に朝鮮半島出身の李某、朴某の二人がおり、四期生にも朝鮮籍や台湾籍の者が、五期生にも台湾出身者がいた。[47] すでに一般社会に出て、鉄道省（国鉄）職員だった者や海外で勤務していた者もいた。[48] 当然、中等学校在籍者も志願者の中に存在した。[49]

志願の資格は当初は満一五歳から一八歳の者で、学歴は不問とされたが、国民学校（尋常小学校高等科）第二学年第二学期修了程度の学力が必要とされた。[50] 年齢・学力のほかに、欠格事項として妻帯者・被破産宣告者・禁固刑以上の受刑者・「素行修マラザル者」があった。[51] 五期生についてみれば、昭和十八年十二月一日時点の在籍者九〇〇名のうち、一四歳一九名（二・一％）、一五歳一〇八名（一二・〇一％）、一六歳一九四名（二一・六％）、一七歳三六八名（四〇・九％）、一八歳二一一名（二三・四％）となっていた。[52]

出身地域別に見ると、同じく五期生については、上位5県は静岡五三名、兵庫四四名、愛知四三名、新潟三七名、広島三六名、植民地については、当該地域居住の日本人が含まれているものと考えられるが、朝鮮三四名、台湾七名、樺太一名、[53] である。

志願の動機は何だったか。ひとつは、いずれ徴兵によって最下級の兵士として招集されるのであれば、早く少年兵に志願して少しでも軍隊社会の階梯を上っておいたほうが有利だ、という観念があった。[54] さらに、戦争が進捗する中、とくにその悪化の中で、自分だけが「能々と銃後で暮らしているべき時でない」と認識し、あるいは、政府のさまざまな宣伝に接して、はやく天皇・日本のために働きたいと考え、すでに進学していた実業学校を中退して

志願した者もあった。[55]

戦局も含めた社会情勢やさまざまな宣伝活動に接して、純粋な少年達の心は激しくゆすぶられ、また、軍服・軍帽・帯剣・戦車・少年兵の宣伝写真に「魅せられじっとしておれない気になった」という。[56] ひとたび試験に合格して採用され、少戦校生徒となってしまえば、自身の都合で退校することはできなかった。[57] から、決断には重いものがあった。

以上のような、いわば志願者本人の能動的な行動による志願・受験は、少年兵各学校の志願要領が、陸軍省兵備課、全国の各聯隊区司令部でないと入手できず、[58] 国民学校生徒や青年学校在籍者など一四、五歳前後の少年が日常的かつ気軽に近づきうる場所で配付されているものではなかったから、それは極めて例外的なものであって、多くの場合、志願は、国民学校などその少年が在籍した学校、具体的には校長とその指揮のもとにある学級担当教員の強い影響下になされたものとおもわれる。[59] 在籍中の学校を通じて願書を入手し、父・母、親権者などの同意のもとで受験し、入校式に父兄が同伴する場合もあった。[60]

2. 入校試験

志願者に対しては、おおむね二回の試験が課された。受験時期つまり何期生の採用試験かによって多少の相違があったが、まず、居住地域において、身体検査および国語・算数の学科試験がおこなわれた。さらにこの試験の合格者が採用予定者として旅費支給をうけ少戦校に集められ、再度身体検査などを受けた。[61] 入校前には、憲兵による身元調査もあったという。[62] 受験に際し血書による採用嘆願書を提出する者もあったという。[63]

身体検査では、体格が年齢によって詳細に定められていたが、満一四歳以上一五歳未満の場合すなわち最低の数値は、身長一・三六メートル以上、体重三一キログラム以上、胸囲六五センチ以上となっており。結核・心臓病・痔疾・四肢の欠損・重症の眼病（トラホーム）や蓄膿症などは不採用となった[64]。また、視力は〇・八以上が「甲合格」、〇・五以上が「乙合格」とされ、いわゆる色覚異常に関する検査もあった[65]。こうした厳しい身体的基準に合致した体格・体力を備え、合格して採用者となった少年達も、訓練が始まってみると、足が戦車のアクセルにとどかないこともあったし、七割の者が入校時よりも体重を減らしたという[66]。昭和十九年度の試験では、受験勉強が勤労動員や生産増強などの妨げにならないよう、学科の試験を「簡単な試問」に替えることが予定された[67]。

3．待遇

以上の如きいわば難関を突破して少戦校に入校すると、月給四円が支給され、さらに少戦校での教育課程を修了すると、その時点で陸軍兵長となって部隊に配属、一年ごとに伍長、軍曹、曹長と昇任し、士官候補生への受験資格も与えられることになっていた[68]。こうした制度は、戦車兵をめざす少年兵達の立場が、戦車学校の生徒隊隊員から少戦校生徒に変わった三期生から確立した[69]。隊付きすなわち兵長となった時点で月給一三円五〇銭が、曹長任官時点で三〇円三五銭が支給された[70]。

この待遇の背景には、少戦校および少年戦車兵に対する軍の高い評価があった。たとえば陸軍機甲本部の一少佐は、次のような認識を表明していた。すなわち少戦校出身の戦車兵幹部は「戦車部隊の至宝であり寵児」であるが、それは徴兵で召募された一般人は、機械の知識に乏しく戦車の操縦その他の技術に短時日に精通することができな

いからであり、そうしたなかで少年戦車兵には大きな存在価値がある、と。[71]

四　少戦校の教育活動

1．期間・組織・内容

少戦校の教育期間は、本来は二年間とされていたが、二年間戦車兵としての教育を受けたのは二期生と三期生だけで、一期生および四期生から最終の七期生はいずれも教育機関を短縮して繰り上げ卒業ないし在校中終戦となった。[72]

二年ないしそれ以下の期間で戦車兵にふさわしい教育をおこなうために、学校組織は、本部・教授部・生徒隊・材料廠の四部で構成された。本部は平時編成で将校九名からなり、教授部は、物理・化学・数学・国語・歴史等普通学に各科二名前後の文官教官と理数科には技術将校も配置されており、加えて、軍事学関係の教官もおかれ、材料廠では車輛・兵器の修理や生徒の実習を担当した。[73] 生徒隊がいわば学科および術科の習得の基本単位となり、将校三四名などが配置され、中隊・区隊・班に細分された。[74] 区隊とは、おおむね生徒四〇名からなり、大尉から少尉の将校が区隊長として教育の責任者となった。[75] 休日に、富士宮の区隊長の自宅を区隊の生徒全員で訪れるようなこともあった。[76]

一日の日課は、おおむね次のようなものであった。午前六時、起床し、中隊舎前に集合、区隊ごとに点呼、銃剣

術等の運動。六時五〇分、整列し駆け足で食堂へ。「戦車兵の歌」などで軍歌演習。朝食、麦飯・味噌汁。食後、号令調整。八時四五分、区隊長より生徒の当番（生徒取締）を通じて当日の命令伝達。学科開始。精神教育が重視され区隊長による講話。教科書が無いため、眠気を催すこともあった。昼食。午後、実戦訓練。材料廠まで駆け足。整備・射撃・操縦の三区隊に分かれて受講。区隊長の講義や説明内容は「副手簿」（メモ帳）に書いておき、これを「正手簿」に整理して、区隊長の点検を受けた。一七時、入浴。一八時、夕食。一九時、号令調整、軍歌演習。各自の机で自習。自習中は私語禁止。ノート転記、「修養日記」（毎日の反省文）記入。二一時、自習終わり、点呼。靴磨き、銃の手入れ、被服・本棚の整頓、戦友との雑談。二一時三〇分、就寝。

日課をこなすほかに食事当番や下士官室勤務などがあり、各中隊ごとに不寝番が、舎内に二名、車廠に二名置かれた。またご真影守護生徒二名が、消灯後、軍装検査を受けた上で着剣して立哨。一名が常時立哨、もう一名が周辺を巡察した。

誕生会があって、毎月その日の昼食は豪華な内容となるといったことがある反面、就寝後に非常呼集があって集合に遅れると駆け足などさまざまな「目玉」が課され、これが一晩に数回繰り返されることもあったり、軍歌指導（演習）の最後に「活を入れられることもあった」ほか、上級生に対する欠礼や敬礼動作が遅いとして「気合を入れられる」こともあった[78]、というが、私的制裁等暴力的なことはなかった、という回想もある[79]。

その他、遊泳訓練や富士登山、校外訓育演習と称して宮城、明治神宮、靖国神社、泉岳寺、鎌倉などの訪問、見学もなされ、かつての生徒からは在校中の楽しみとして記憶されている[80]。

2．戦争末期

戦争末期になると、戦局の推移・悪化に対応して、それ以前とは違う教育内容や活動が持ち込まれた。

昭和十九年六月入校の六期生は、三班に分けられ、第一班が操縦員、第二班が戦車砲撃手、第三班が学校防衛隊員として訓練を受けた[81]。

卒業前には、調整行軍と称して仕上げの演習がおこなわれた。農家などに分宿して、富士山を戦車で一周するものだった[82]。こうした訓練の結果、少年戦車兵達は、戦車操縦の技量をあげ、自分自身の戦車のエンジン音を聞き分けられるまでになった[83]。

燃料不足は少戦校にも及び、訓練のために戦車を動かすことができにくくなった[84]。そのため、生徒達は、空いた時間戦車生産の工場に動員されたほか、工作機械の疎開作業、演習場の開墾や家畜の飼育などにもあたった[85]。

3．生徒の殉職

少戦校の教育、なかでも術科に関わる演習の最中には、生徒が殉職する事故も起こっている。そうした殉職事故をめぐって、教官と生徒の間に感情的齟齬が生ずる場合もあった。

昭和十八年三月十一日、夜間の無灯火訓練中、二〇時過ぎ、前照灯を消し、先行する車輌の尾灯だけを目標に走行するなかで、一輌の戦車が道路から転落し、砲塔から上半身を乗り出して指揮していた生徒一名が死亡した。一八歳だった[86]。

事故による殉職者の追悼、慰霊をめぐって、いわば平常とかわらず落ち着いた生活の中で訓練そのものは続行しようと意図する学校・教官と、戦友の死に直面して冷静さを失いかけた生徒との間で、事態に対する認識の違いが表面化した。短時日ではあるが、生徒側に、授業を拒否するといった動きもあったようだ[87]。

4．西富士演習場

本格的な演習つまり少戦校の術科教育の中心は、少戦校とは別に開設されていた西富士演習場で展開された。そもそも西富士演習場および敷地内の廠舎は、静岡県富士郡上井出村、一部が山梨県南都留郡におよび、東部軍管区の管轄の下で、愛知・静岡・富山・石川・岐阜などの東海軍管区内の諸部隊などに使用された[88]。富士山西麓、静岡県に所在する少戦校も、東海軍管区内の部隊として西富士演習場を使用した。

演習場では、少戦校の演習のほか、たとえば歩兵部隊と砲兵部隊の連携、協同の戦法研究のための演習などもおこなわれた[89]。少戦校が立地したことを反映したものと考えられる対戦車戦闘に関する演習もなされた[90]。

現在、演習場内にはトーチカも残されており[91]、他の演習場同様、多様な演習がおこなわれたことを伺わせる。

およそ四三〇〇ヘクタールにおよぶ同演習場は、地域では「遠っ原三里」と称され、上掲史料およびその他[92]を考慮すれば、おおむね昭和十五年頃に設定が始まり、既にみたように、昭和十七年頃までに土地の買収や住民の移転をほぼ「強制的」におこなって、「茫然自失」の地元民[93]をよそに整備、完成させた。

五　少戦校の宣伝活動

1．宣伝による生徒募集

十代半ばから後半の年齢の少年が戦場を志向するにあたっては、さまざまな要因が作用した。たとえば、昭和十七年ごろから、戦車や少戦校に関する著作が、多数刊行されている。これらの著作に共通しているのは、まず、文章や内容が平易である。戦車に関する技術的専門的な解説や、少戦校に関する軍令上の意義が示されているわけではなく場合によっては、物語、お話調で、少年戦車兵の少戦校での日常生活が紹介されている。さらに一般の少年が少年戦車兵になろうとした時に必要となる、実際的な情報が記載されている。藤田実彦著『少年戦車兵』は、一冊六〇銭で初版一万部発行されたが、戦車の歴史や既に始まっていた大陸などでの戦争と戦車の関係などの記述の前に、まず、「蒼き諸君に！」という一章を設けて、少年戦車兵に適齢の少年向け文章を載せている。[94] 昭和十八年に一冊七〇銭で初版五〇〇〇部出された佐藤隆秀著『少年戦車兵志願読本』は、書名からもわかるように、より実際的な内容である。少戦校の概要や少戦校卒業者の待遇等についての本文のほか、入校試験問題も掲載されている。[95] 船山馨著『裾野』は一冊二円一〇銭と比較的高価だが、著者が少戦校で取材した内容をもとに、少年戦車兵の学校での活動を小説の体裁で刊行したものである。[96] 書名は言うまでも無く富士山のそれである。竹内卓樹著『少年戦車兵となるには』も、少年達のまさに書名のような疑問に答え、さらに志願書類の書き方まで解説してあって、極め

て実用的内容となっている。巻頭に軍人勅諭や戦陣訓も掲載されていて、当然、巻末には入校問題集もついている。[97]少年戦車兵としての「覚悟」として、身体の「強剛」であることや責任を重んずること、服従の精神などを説いている。[98]そのほか、少戦校一期生で戦車第二聯隊に配属され、昭和十七年三月ビルマで戦死した原田敬一軍曹[99]に関しその活動を称揚することを通じて、少戦校への志願を少年達に訴えかけた本間楽寛による『少年戦車兵魂』[100]がある。

文字による宣伝だけでなく、グラフ誌に少年戦車兵などの写真を掲載する手法もとられた。たとえば内閣情報部によって刊行された国策宣伝グラフ誌『写真週報』には、複数回、少戦校や少年戦車兵の写真が一部は記事とともに紹介されている。[101]

実物も登場させて人々に訴えた。昭和十九年四月三十日、戦車による東京都心での行進がおこなわれ、沿道には「少年戦車兵の勇姿を仰いで童心を弾ませる子供たち」がいた。[102]

戦車兵だけでなく他の少年兵を含めた講演会の場での宣伝も計画された。昭和十八年十一月十五日、日比谷公会堂において東京聯隊区司令部が主催し、大日本婦人会東京都支部および朝日新聞社後援のもと、聯隊区司令部などの軍人や作家吉屋信子が少年兵募集のために講演した。[103]

少戦校での少年達の「一日入営」もおこなわれた。昭和十七年十月二十五日、東京・千葉・神奈川・静岡からの一五〇名の少年達が、少戦校を訪れ、戦車に乗ったり、同じ出身地の少戦校生徒と懇談した。[104]

以上のほか、後述するような大規模な宣伝活動も含め、それらは「上司」おそらく教育総監部によって、計画、立案され、少戦校側はその指示に従ってこれを執行したとされる。[106]

2．軍神

熊本県出身で昭和十三年五月、徐州附近において戦死した西住戦車長は、後に軍神とされ、戦死の翌年昭和十四年には、西住に関する、一般向けはもちろん児童・生徒向けの図書も多数刊行されて[106]瞬く間に英雄となった。

さらに翌年の昭和十五年十一月には、菊池寛原作、木村公三郎監督、上原謙・佐分利信等出演の松竹大船製作のモノクロ映画『西住戦車長』（一一二六分）が封切りとなった[107]。

昭和に入って最初の軍神とされた西住は、マスコミの宣伝によって、「子どもにとっても身近で、憧れの存在」となったとされるが[108]、上述の原田軍曹の存在などを勘案すれば、軍神であることだけが、後に続こうという少年達の行動の主因であったかどうか、より詳細な検討が必要になるかもしれない[109]。

3．映画

昭和十九年三月、少戦校を紹介した映画『富士に誓う』が静岡などで公開された[110]。『富士に誓う』は陸軍機甲本部監修、社団法人日本映画社製作でモノクロ五八分の作品。原作は海音寺潮五郎とされる[111]。日本映画新社の戦記映画復刻版シリーズDVD版によれば、原題『富士に誓う　少年戦車兵訓練の記録』は昭和十八年の制作で、演出は小畑長蔵。内容を簡略に記せば以下の通り。まず、タイトルバックに富士山。少戦校生徒が出演して、実際の訓練を通じて少年が一人前の戦車兵に成長してゆく過程を描いている。富士山のカットがたびたび挟まれ、雲の流れや雪の有無によって、時間の経過を表現している。戦闘訓練の中で、戦車が樹木をなぎ倒して進む場面などで少年戦

車兵の活動の勇壮さを強調する一方、久しぶりの休暇で郷里に帰った少戦校生徒と両親、家族との語らいなども、描かれている。そのほか、少年戦車兵関係の映画として朝日映画製作の文化映画『少年戦車兵』があった。文字で見る文化映画叢書の一冊、大内秀邦著『少年戦車兵』[112]によれば、少戦校（戦車学校生徒隊）一期生の活動を記録したものだと言う。

これらの映画は、少戦校関係者が地方を回って生徒を募集する際に学校などで上映され[113]、少戦校の宣伝に少なからぬ貢献を為したものと考えられる。

4．「少国民総決起大会」

朝日新聞社は、昭和十八年十二月十一日と十二日の二日間、「決戦下、陸軍少年兵の勇姿に親しみ、少国民の士気を昂揚して少年兵志願の熱意を強化するため、「少国民総決起大会　続け陸軍少年兵」を、東京・大阪・名古屋・福岡・仙台で企画した。陸軍省・文部省・内務省・仙台師団・名古屋師団などが後援、東京都・日本放送協会・大政翼賛会・大日本婦人会などの協賛のもと、東京陸軍少年飛行兵学校・大津陸軍少年飛行兵学校・陸軍少年通信兵学校そして少戦校などの生徒延べ五千名が参加し、各開催地などの国民学校高等科や青年学校などの生徒五〇万名を集めて開催する、とされた[114]。

東京では、総数一〇万名が集まり、代々木練兵場で受け付けられた少年兵の仮志願は二万名に達した。記者の取材に対し一四歳のある少戦校志願者は、小さい頃から乗り物好きであったことや、西住戦車長の、映画『富士に誓う』に影響され、少戦校入校を希望するようになり、最初反対していた父親を叔父とともに説得したことなどを語

った。[115] 東京大会では、第一日目に少年兵一二〇〇名が両国・深川・門前仲町・月島・築地・日本橋などを「歓呼と感激の波」のなかで行進し、そのなかには少戦校の戦車一五輌も含まれていた。「富士の霊峰の下に鍛えられた少年戦車兵の姿は十七、八の若さとも思えぬ強靭さをすでに満々とたゝえて、振り仰ぐわれ□□の眼にすでに無限の信頼を与えてくれる頼もしさ、（中略）少女鼓笛隊は鼓も破れよ、唇もさけよ、轟音にまけじと『少年戦車兵学校の歌』を高らかに奏でる、戦車に踏みつぶされるばかりに押し寄せる学童たち熱狂歓呼の中に鉄獅子の巨姿は続続学庭に進入する。校内に待ちかまえた（中略）少年喇叭隊の奏する『気を付け！』の喇叭、五年、六年の生徒たち一斉に瞳をあげて鉄獅子を迎う、車上の少年兵の面上に浮ぶ感激の紅潮、若い瞳と若い瞳がかちあって散る火花『続け少年たち！』『つゞきます、少年兵に！』――感激の交感、学童と戦車兵との会食学童たち心尽しのお芋とみかんを食べながらの演芸会など涙の出るような美しい風景があとからあとへとつゞ」いた。[116]

九州では、少戦校生徒は、まず北九州地区で国民学校を訪問し、小倉で一般家庭に宿泊した。また、近所の国民学校生徒と懇談し、兵科の内容や毎日の生活などについて話したほか、持参した二葉の写真、少戦校正門から写した富士山と、戦車に搭乗して富士の裾野で訓練する様子、を見せ、あわせて富士登山のことも話した。小倉市立の国民学校で講話をおこなったある少戦校生徒は、あらかじめ話し方を学んだ。翌日、陸軍小倉造兵廠から借用した中戦車で、小倉から福岡まで街頭を行進した。戦車五輌のほか、行進の先頭をサイドカーが行き、輸送トラック二台が戦車に続いた。少戦校で使用していた戦車と違い、造兵廠で生産されたばかりの新品の車輌で、長距離の試運転も兼ねて貸し出されたものだったという。[117]

仙台においては、大会の前日十二月十七日に少戦校生徒一〇〇名などが仙台入りした。翌十八日大会当日、少年

兵諸学校生徒九四〇名が仙台街頭を行進し、さらに十九日、宮城県下国民学校、中学校、青年学校の約一三〇〇〇名、秋田・岩手・山形・福島の代表約五〇〇名、仙台市内の女子中等学校生徒、市民総計一〇万名が集まった。少年兵志願の仮受付がおこなわれ、一万五〇〇〇名が志願した。少年兵の分列行進、志願者代表の挨拶などがおこなわれ、仙台上空には航空部隊が飛来した。[118]

六　少戦校の活動と富士山

1．設立・募集・入校

少戦校のさまざまな活動とその背景となっている精神には、富士山の存在が大きな影響を与えている。たとえば、設立にあたっては、すでにみたように、立地等に関する検討委員会が構成され、富士山の西麓、西富士演習場に隣接する上井出の地が選ばれたが、その選定理由の一つには、国土の象徴としての霊山・富士山の存在が挙げられていた。[119] さらに、なぜ富士山なのかといえば、その歴史性や「きよらかな地」であることが指摘されている。[120] 清よらかで聖なる土地にあることが富士山の霊性やその地が神聖であることを生み出しているのか、それとも聖山・富士山が存在するからその地が神聖なのか、そこまでの追求は富士山の存在に圧倒されてしまって、いわば委員会の議論は堂々巡りのままなのではあるのだが。いずれにしても、そうしたことがないまぜになって、少戦校設立の環境条件として意識されているのである。

志願者の募集にあたっても、前述のように、富士山の写真を国民学校の生徒に見せたり、訓練の一環としておこなった富士登山について語って聞かせたりしている。国民学校生徒は少戦校そのものの説明よりも、富士山そのものに関心を示したという。[121] また、少戦校に関するある書物は「後書」のなかで、「皇国は今、殉国の血にもゆる青少年諸くん（ママ）の総けつ起を求めている。悠久三千年の神州にき然としてそびえ立つ霊峰富士は、諸くんが裾野へぞくぞくと集って来るのを待っているのだ。いざ、行こう、陸軍少年戦車学校へ」、と読者を少戦校へ誘っている。[122] さらに、既に触れた少戦校教科書『国語教程』掲載の少戦校紹介文「我が学校」は、少戦校生徒の募集活動でも使われたものと思われるが、そのなかでは、「皇国の表象たる霊峰富士を仰ぎ」の一節があり、少戦校での活動が「霊峰富士」のもとでおこなわれていることを、紹介し強調している。[123]

当然、入校においても、富士山が意識された。たとえば昭和十八年十二月一日の第五期生入校式において、校長玉田美郎少将の訓示は、「神嶺富岳の下錦繡に彩られ正気天地に満つる秋」で始まり、毎朝、富士山を仰いで「国体の崇高悠遠を偲びて鴻嶺の大義心を練り」つつ訓練にはげみ、「百戦必勝の戦士たらんことを期すべし」と、少年達に呼びかけた。[124] 入校の日は、軍人としての誓いの場とされ、富士山に対してなされたこの誓いを破ったら、そのことは自分が日本人であることを否定することだと、認識された。[125] 式に集まってくる入校生にとって、鉄道の車窓から見えた富士山は、「荘厳極まりなく」また「胸が躍る思い」で、少年達は、汽車から降りて眼前に広がる富士山を目の当たりにして、「あ、本当に来れたんだ」という思いを抱いたという。[126] こうした思いをもった入校生にとって、富士山はこれすなわち少戦校といっても良い存在だった、とすることができよう。入校式には、入校生の父母が同伴することもあった。そうした父母・父兄にとっても、富士山の存在は、子弟を少戦校にあずけるうえで

安心の源とされた[127]。

2．訓練

少戦校の日常の訓練のなかで、富士山は生徒たちを励まし、元気づけ、少年兵としてのかれらの誇りの源泉ともなっていた。三期生Aは、「うれしいとき、淋しいときは、この富士に向って大声をはり上げた」[128]というし、五期生のBは、白雪で山容全体がおおわれたり、さまざまな富士の姿を目にして、「富士はいつ見てもいいなあ！」[129]と感嘆し、同じく五期生のCは岳麓において戦車兵として術科・学科の勉学をおこなえること自体を「幸福このうえもなし」[130]と感じていた。さらに、生徒が故郷の家族に送った手紙のなかにも、「神嶺富士に誓い、学科に術科にせい出しています」とか、「富士山のしたで、毎月訓練に一生けんめいだよ」と、自らの訓練の日常を説明するのに、富士山のもとで活動していることに言及している[131]。

こうした富士に対する意識は、昭和十八年に用意された、複数のいわば仕組みによって、一層強化された。ひとつは、昭和十八年春、少戦校構内に創建された若桜神社である。その場所は校庭のほぼ東隅で、社殿の後方には富士山がそびえたっており、別言すれば富士を背景に神社が置かれているように見える位置であった。「生徒が毎日ここに参拝し、富士を仰いで心を清め、尽忠報国の志を固め誓わせるようにした」のだった[132]。さらに、もうひとつの「仕組み」は、校歌「富士に誓う」の制定だった。作詞は相馬御風、作曲は陸軍軍楽隊[133]。「陸軍少年戦車兵学校校歌」はその冒頭で、「朝空高く　聳え立つ　富士の神嶺　仰ぎては　悠久無限　皇国の　大義不動の　信高め」と詠う。校歌のほかにも、少年戦車兵をうたった軍歌に「少年戦車兵の歌」、「富士に誓う」があり、いずれも一番

の歌詞のなかに、前者では「朝に仰ぐ富士が根や」、後者では「富士よ誓うぞ大和魂」といった一節があって[134]、少戦校および少年戦車兵の活動や任務を、神嶺富士と同一化することで、その神聖さを強調する役割を果たしているものと理解できよう。

しかし、富士は、決して常に神聖であり英雄的であり霊的なものであったわけではない。たとえば演習で戦車から放った砲弾が標的をはずれ、富士の裾野のどこかあらぬ場所に着弾することを生徒達は「富士崩し」と表現し、軍歌の替歌の中にこの語を入れて歌ったという[135]。富士山は必ずしも神がかった勇ましさの象徴というだけでなく、射撃を外すという失敗の「被害者」としても存在したのである。また、各地から入校した生徒たちも、初めて富士を見たときこそ、その感動は大きかったが、富士の裾野での生活が次第に日常のこととなってしまえば、「酷しい訓練に追われそれほどの執着はなかったと思」われるようになっていったようだ[136]。加えて、生徒一人ひとりの生育環境からくる、山岳観とでも言うべきものにも影響された[137]、ようだ。

3．富士登山

正月と盆の帰郷や校外での遊泳訓練などとならんで、生徒たちに支持を受けた訓練に、年に一度の富士登山があった。たとえば二期生と三期生合同で夏季休暇前におこなわれた富士登山の演習は、富士宮口から軍人勅諭、筆記具、キャラメルといったものを入れた雑嚢と杖を持ち、区隊ごとに、一般登山者に混じって、登山した。五合目で三〇分休み、夕暮れが七合目あたりであった。二〇人ごとに山小屋に宿泊し、少年戦車兵の歌などの軍歌演習をおこなった。翌朝、山頂で宮城を遥拝し、区隊ごとに勅諭を奉読した後、下山した[138]。

生徒のなかには、裾野から見上げるのとは違う「荒涼とした大地」の有様に驚き、富士は下から眺めるのが一番良い、と感ずる者もあった[139]。

こうした富士山体験は、上述の帰郷の折などに、家族のもとで披露されつつ、少戦校で学ぶ者の、誇りと責任の一端を形成するのに寄与したものと思われる。

七　卒業後

1．戦地へ

少戦校卒業者は、専門的知識や戦技を磨いた戦車兵の若き下士官として、第一線に配属されていった。上掲の吉留氏の回想にあるように、中国大陸の戦線を疾駆し、また、フィリピンではコレヒドール要塞の攻略戦に参加し[140]、そのほか、マレー半島や太平洋の島々でも戦った。

そうしたことの当然の帰結として、各地の戦線で戦死者が生じた。全体として、アジア太平洋戦争において、少戦校の卒業生の五人にひとり、二〇パーセントが戦死したとされているほか、三期生のある区隊では四二名中一六名が戦死しており、その割合は四〇パーセント近い[141]。『富士宮市史』は卒業して戦地に赴いた五期生までの戦死者を総計五九五名とし、同じく五期生までの在籍生徒数を二三六八名としているので[142]、戦死者の割合は約二五パーセントとなる。

配属された部隊の所在地や戦地に居た期間など、個々の少戦校出身者の軍歴によって、死傷者の割合は当然違いがあったものと思われる。

2．船舶部

少戦校の修了者の一部は、エンジン技術を習得していたことから、南方戦線や本土沿岸などで海上輸送に従事する船舶部隊に配属された[143]。また、少戦校在校中、船舶部隊派遣要員として、技術将校から船舶に関する講義を受けた者もあった[144]。

四期生からは約七〇名が船舶部隊に配属された[145]。

さらに五期生のなかには、少戦校修了後、広島・宇品に派遣され、陸軍潜水輸送艇の訓練を受けたものもあり[146]、愛媛県伊予三島で陸軍潜水輸送教育隊に配属された者もあった[147]。

こうした船舶部隊への配属は、ミッドウェー海戦後顕著になった制海権の喪失という、戦況全般の変化に対応したものだった[148]。

おわりに――敗戦と閉校

昭和二十年九月の敗戦時点で、少戦校の編成は、将校教員七四名、生徒一五二六名、兵（衛生兵・技術兵等）七八名で、生徒は昭和十九年六月一日入校の六期生、二十年三月七日入校の七期生、同二月八日入校の第一期特別幹

部候補生が在籍した。車輌は砲塔修理中のもの二〇を含む中戦車八四輌、軽戦車七二輌となっていた。[149]

八月十五日、翌日から水泳訓練が予定されておりその準備をおこなって、生徒たちは校庭に整列し、終戦の玉音放送を聞いたが、その音声は不明瞭で敗戦を実感できない者もあり、国民はさらに奮闘せよという意味に理解した者もあった。[150] 校長の命により、生徒は午睡をとった。[151]という。

生徒の多くは玉音放送があった日から三日後頃、支給品を持ち夜間に徒歩で大宮駅（現　富士宮駅）に向け出発したが、自動車で門を出て田圃に横転し、負傷者数名が近接する上井手陸軍病院へ一週間入院したのち帰郷可能となる騒ぎもあった。[152]

重要書類の焼却がおこなわれ、自動車教程や戦車教程等は真っ先に廃棄されたが、焼却廃棄にあたった者は、うな垂れて書類を燃やしていた。[153]という。

将校は若桜神社に整列し、ご真影奉焼を執行したが、将校のなかには抗戦を意見具申する者もあり、また、抜刀して校長室に来たり、全校挙げての抗戦を言う者もあり、中央の状況を知るために、武装した将校斥候を東京へ送った、という。[154]

木川田校長の副官は、校長の自決を慮り、彼の軍刀を隠して自分の下宿に招き同宿した。[155]

現地雇用の学校職員も逐次帰郷し、少人数で学校財産の保全をはかっていたが、軍靴やピストルの盗難もあった。[156]

昭和二十年三月、米軍兵士およそ三〇名が来校し、三日間の作業で兵器などを接収し、戦車を爆破して去った。[157]

十二月三十一日、残留将校、下士官も予備役となって学校を辞し、名実共に少戦校は閉校した。[158]

少戦校に対して、富士山は、その広大な裾野の存在によって、ノモンハン後の軍事状況の下で、急増されたと言

っても良い戦車兵、それも第一線で命を賭した活動が期待される下士官養成のために、専門的な演習を支障なくおこなうためのいくつかの条件を提供した。

まず、自然的条件。火山灰と溶岩から成るその地は、たとえば見学に来校した将校の夫人たち、つまり一般人たちが、その悪路ぶりに、もう二度と来たくない、という感想をもらすほどの場所だった[159]が、弾雨を潜って戦車を疾駆させる舞台として、この上ない場所だった。

次に、精神的条件。生徒にとって、富士山は日本の象徴であり、山岳という自然条件のひとつでありながら、日本文化の象徴でもあった。こうした富士山観は、生徒たちに入校以前に富士の姿を実見する経験があろうがなかろうが、関係なかった。この唯一無二の聖なる山は、入校以前、家庭で、学校で、その他様々な機会に彼らの精神に既に刷り込まれたものであった。少戦校は、そうした少年達の精神の在り様を基盤に、かれらが護るべきものを象徴する山が見下ろす中で、訓練を積み重ねたのであった。

注

（1）九七式中戦車に関する記述は以下による。玉田美郎「少年戦車兵学校のあゆみ」若獅子会手記編集委員会編『手記　少年戦車兵』若獅子会、一九七一年、二六頁。原乙未生・栄森伝治・竹内昭『日本の戦車〈新版〉』出版協同社、一九七八年、三五・三六・八六～八八・九一頁。上田信『日本戦車隊戦史』大日本絵画、二〇〇五年、一〇八・一〇九・一二二頁。

（2）柳瀬正治「泣いてたまるか〝少年戦車兵〟24時間」『丸』二四―四、一九七一年四月、一〇九頁。毎日出版企画社編『別冊　一億人の昭和史　陸軍少年兵』毎日新聞社、一九八一年、一一八頁。

（3）『若獅子』編集委員会「『我が学校』のご紹介」『若獅子』四九、二〇一〇年一月。「我が学校」は少戦校の教材、国語教程に使

われた少戦校の紹介文。

（4）「戦車部隊略史」前掲『手記　少年戦車兵』。機甲会編『日本の機甲六十年』機甲会、一九八五年、三～五四頁。後には「陸戦の華型」などとされながらも、ノモンハン戦でのソ連軍機甲部隊に対する劣位が認識されるまでは、戦車の防弾鋼鉄に護られた兵器であるという特徴に、「卑怯者」の使用するものだという認識がおこなわれて、このことが日本の戦車の後進性の原因となったという。野口松一「戦車の急速増産」三菱重工業株式会社社史編纂室編『三菱重工業株式会社史』三菱重工業、一九五六年、五九三頁。

（5）高野邦夫「『近代日本　軍隊教育史料集成』について」高野邦夫編『近代日本　軍隊教育史料集成　解説』柏書房、二〇〇四年、四一～四三頁。

（6）安田武「〝体制〟に殉じた少年兵たちの時代背景」前掲『別冊　一億人の昭和史　陸軍少年兵』。

（7）奥村芳太郎『悲傷　少年兵の戦歴』毎日新聞社、一九七〇年、四八・四九・五一・五七・六六頁。

（8）逸見勝亮「少年兵史素描」『日本の教育史学』三三、一九九〇年一〇月。

（9）加登川幸太郎『帝国陸軍機甲部隊』原書房、一九八一年（増補改訂）二七九頁。

（10）富士宮市史編纂委員会編『富士宮市史』下、富士宮市、一九八六年、九八二・九八四・九八五頁。

（11）北原道子「朝鮮人少年戦車兵――北千島占守島に動員されたハラボジの聞き取りから――」『在日朝鮮人史研究』三八、二〇〇八年一〇月。

（12）玉田美郎『ノモンハンの真相』原書房、一九八一年、二一三頁。

（13）同前、三頁。

（14）前掲「少年戦車兵学校のあゆみ」二〇頁。

（15）玉田美郎「陸軍少年戦車兵学校創設のあゆみ」『若獅子』四三、二〇〇四年一月。

（16）加登川幸太郎「あとがき」前掲『ノモンハンの真相』二一六頁。

（17）前掲『富士宮市史』下、九八二頁。陸軍少年戦車兵学校『生徒心得』（一九四三年一二月一日改訂版）、三頁。

（18）『陸軍少年戦車兵学校状況説明資料　昭和二十年九月五日』（防衛省防衛研究所図書館所蔵）。前掲『生徒心得』。前掲『富士宮

市史』下、九八二頁。

(19) 前掲『陸軍少年戦車兵学校状況説明資料　昭和二十年九月五日』

(20) 前掲『生徒心得』三頁。前掲『富士宮市史』下、九八四頁。

(21) 玉田美郎「少年兵の母校　巣立った四千の若獅子――第一期から〝繰上げ〟前線へ」前掲『別冊　一億人の昭和史　陸軍少年兵』一二一頁。前掲『富士宮市史』下、九八八頁。

(22) 前掲『富士宮市史』下、九九〇頁。

(23) 前掲「少年戦車兵学校のあゆみ」二二頁。前掲『富士宮市史』下、九八八頁。

(24) 前掲「陸軍少年戦車兵学校創設のあゆみ」。前掲『富士宮市史』下、九九〇頁によれば、十七年四月、人穴地区六二戸に移転申し渡しがおこなわれ、憲兵立会いの下承諾書に署名などさせるといったことがなされたという。こうした動きも少戦校の転営に関わる動向と無関係ではないと言ってよかろう。前掲『陸軍少年戦車兵学校状況説明資料　昭和二十年九月五日』。ただし、前掲『生徒心得』三頁は八月三日から六日にかけて転営した、とする。

(25) 前掲『生徒心得』三頁。

(26) 前掲「少年兵の母校　巣立った四千の若獅子――第一期から〝繰上げ〟前線へ」一二二頁。犬上幸夫「富士山頂の小石」『若獅子』四二、二〇〇三年一月。昆野昭二『富士とともに　第五期生のあゆみ』富士ヶ嶺会、一九九三年、三五頁。

(27) 前掲「少年兵の母校　巣立った四千の若獅子――第一期から〝繰上げ〟前線へ」一二二頁。

(28) 前掲『陸軍少年戦車兵学校状況説明資料　昭和二十年九月五日』。

(29) 皇太子による視察の中止の理由については、赤痢患者の発生とも、「警戒警報」が発せられたためともいう。小田英孝「懐かしい昔の思い出」『若獅子』四四、二〇〇五年一月。前掲『富士とともに　第五期生のあゆみ』一二〇頁。舟橋信一「落日の富士に起つ最後の戦車連隊」『丸』二四―四、一九七一年四月、一九六頁。

(30) 小山忠之「ルポ上井出陸軍少年戦車兵学校」『季刊　富士宮わがまち』二、一九八二年八月、三〇頁。沢田正彦「陸軍少年戦車兵学校顛末」『月の輪』一二、一九九七年六月、七一頁。前掲『富士宮市史』下、九九六頁。

(31) 福原豊編『富士に誓う　少年戦車兵第五期生の歩み（第1集）』富士ヶ嶺会（一九六九年序文）、五五頁。片岡卯之吉「終戦の

思い出」『若獅子』四五、二〇〇六年一月。

(32) 前掲『陸軍少年戦車兵学校状況説明資料　昭和二十年九月五日』。

(33) 外山武・二宮竜洲・浅村直男編『岳麓　富士とともに』富士ヶ嶺会、一九七〇年、八六頁。前掲「陸軍少年戦車兵学校創設のあゆみ」。

(34) 前掲『富士宮市史』九八七頁。前掲『岳麓　富士とともに』八八頁。

(35) 他に雇員には青年学校在籍者も相当数いたため、彼らのために、少戦校内に私立の上井出青年学校を設立した、ともいう。前掲『岳麓　富士とともに』八八頁。また、教官の住宅は富士宮市にあった。同前、八七頁。香山祐三郎『陸軍機動艇の歌』一九八三年、一頁。現在同地には、同校の教官・卒業生・同校閉鎖時点の在校生などによって「若獅子神社」が建立されている。「痕跡」に関しては、ビデオ・アース・ケーツー制作『遠くなる戦争の記憶』（二〇一四年、カラー、六四分）参照。

(36)『ふるさとかみいで』静岡県富士宮市上井出区、一九八九年、一四三頁。

(37)『静岡県戦後開拓史』静岡県開拓生産農業協同組合連合会、一九八一年、三七一頁。

(38) 前掲『富士宮市史』下、九八五・九九一頁。

(39) 同前、九九一頁。

(40) 前掲「陸軍少年戦車兵学校顛末」七一頁。

(41) 山本四郎「富士開拓と少年戦車兵学校」富士開拓30年史編纂委員会編『富士開拓30年史』富士開拓農業協同組合、一九七六年、二六八頁。前掲「陸軍少年戦車兵学校顛末」七一頁。

(42)『読売報知新聞』昭和一九年一月一日第三面「少年戦車兵　裾野の巻狩」。

(43) 千葉幸『送電線の向こうから　もと原発所長の回想記』文芸社、2003年。

(44) 千葉幸『私の人生　豆たん・電気と原子力』二〇〇九年、七頁。

(45) 齋藤新作「少戦校入校前後の思い出」『若獅子』四六、二〇〇七年一月。

(46) 齋藤新作「自分史　私は少戦校を誇りに生きた」『若獅子』五〇、二〇一一年一月。

(47)『朝日新聞』昭和一五年一二月二日第三面「気を吐く半島の二少年　誉れの少年戦車兵合格」。前掲『岳麓　富士とともに』八

八頁。隈元信次・大野昂・金井優治「『謝精一命』若獅子神社に合祀」『若獅子』四三、二〇〇四年一月。本間敬「嗚呼　実に五十七年振りに謝精一君の御霊靖国神社に合祀成る」『若獅子』四二、二〇〇三年一月。

(48) 前掲『富士に誓う　少年戦車兵第五期生の歩み（第1集）』三頁。幹田巌「遥かなる記憶」『若獅子』四八、二〇〇九年一月。

(49) 斎藤実「爆音こそ少年戦車兵の子守唄」『戦車と戦車戦』光人社、二〇一二年、二二二頁。

(50) 「附録（陸軍少年戦車兵学校案内）」大隈俊作『少年戦車兵学校の生活』越後屋書房、一九四四年。前掲『富士宮市史』下、九八八頁。のち、昭和一八年五月五日、陸軍省令第一九号により志願者最低年齢は満一四歳に改められる。前掲『生徒心得』三頁。

(51) 前掲『少年戦車兵学校の生活』六頁。

(52) 「昭和十八年度陸軍少年戦車兵学校生徒志願心得」前掲『富士とともに　第五期生のあゆみ』二八〇頁。

(53) 同前。

(54) 前掲「自分史　私は少戦校を誇りに生きた」。

(55) 内脇忠雄「入校迄の思い出」『若獅子』四六、二〇〇七年一月。前掲『送電線の向こうから　もと原発所長の回想記』二五～二六頁。

(56) 前掲『私の人生　豆たん・電気と原子力』一二頁。

(57) 前掲『生徒心得』八頁。

(58) 「陸軍諸学校志願者の心得」『若桜』一―一、一九四四年五月。

(59) 秋田県における海軍志願兵の場合、各町村長・国民学校長が打ち合わせをして、父兄・雇傭主・本人の不志願の考え方を是正し、校長が志願の奨励員として活動することなどが決められた、という。戸田金一『学校往復公文書等を主資料とする国民学校経営の実証的研究〔昭和63年度科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書〕』秋田大学教育学部、一九八九年、二四～二五頁。

(60) 前掲「附録（陸軍少年戦車兵学校案内）」。前掲『少年戦車兵学校の生活』三二～三三頁。ただし、両親にも先生にも無断で町で買った印鑑を願書に押して応募したという者もいる。前掲『私の人生　豆たん・電気と原子力』一二頁。前掲『手記　少年戦車兵』四八頁。

(61) 前掲「附録（陸軍少年戦車兵学校案内）」。福島豊「機械化部隊の華」前掲『悲傷　少年兵の戦歴』六九頁。「昭和十八年度陸軍少年戦車兵学校生徒志願心得」前掲『富士とともに　第五期生のあゆみ』二八〇頁。
(62) 前掲『手記　少年戦車兵』四八頁。
(63) 前掲『富士とともに　第五期生のあゆみ』八二頁。一期生の倍率は約五五倍に及んだ。前掲「少年兵の母校　巣立った四千の若獅子」一二〇頁。当時静岡県下中等学校の平均倍率は約一・五倍。『静岡新聞』昭和二〇年三月一〇日第二面「県下中等入学志願者数発表さる」。
(64) 前掲「附録（陸軍少年戦車兵学校案内）」『少年戦車兵学校の生活』。
(65) 「これだけの体が必要」『若桜』一―六、一九四四年一〇月、七一頁。
(66) 舟橋信一「落日の富士に起つ最後の戦車連隊」『丸』二四―四、一九七一年四月、一九四頁。
(67) 『朝日新聞』昭和一九年八月二三日第三面「学科試験も廃止する　簡単になる陸軍少年兵召募」。
(68) 前掲『富士宮市史』下、九九八頁。佐藤孝『少年戦車兵物語』東亜書院、一九四二年、二一六頁。
(69) 前掲『岳麓　富士とともに』九〇頁。前掲「少年兵の母校　巣立った四千の若獅子――第一期から〝繰上げ〟前線へ」『別冊一億人の昭和史　陸軍少年兵』一二二頁。一期生、二期生は生徒身分のまま部隊へ配属された。前掲『富士とともに　第五期生のあゆみ』三四頁。
(70) 前掲「附録（陸軍少年戦車兵学校案内）」。
(71) 佐藤隆英「大東亜戦争と少年戦車兵」『陸軍画報』一〇―三、一九四二年三月、五七頁。
(72) 前掲『富士とともに　第五期生のあゆみ』三四頁。
(73) 前掲『富士に誓う　少年戦車兵第五期生の歩み（第1集）』二頁。前掲『富士宮市史』下、九八八頁。
(74) 同前。後述の如く、一期生、二期生が生徒隊付となって指導する場合もあった。前掲『岳麓　富士とともに』八八頁。
(75) 千葉幸「『少年戦車兵での思い出』随筆集」『若獅子』五〇、二〇一一年一月。前掲『富士宮市史』下、九八八頁。
(76) 前掲「『少年戦車兵での思い出』随筆集」。
(77) 以上の日課などについては、前掲「泣いてたまるか〝少年戦車兵〟24時間」。前掲『富士とともに　第五期生のあゆみ』九七頁。

前掲「ルポ上井出陸軍少年戦車兵学校」二八頁。戦車の操縦訓練は、まず、「操縦架台」という模擬的な台車様の装置で基本練習をおこなった。「富士山麓に鍛える少年戦車兵」『若桜』二―一、一九四五年一月。

(78) 前掲『富士とともに　第五期生のあゆみ』九八・一〇〇頁。

(79) 前掲「少戦校入校前後の思い出」。

(80) 同前。

(81) 前掲『富士宮市史』下、九九六頁。

(82) 山崎正治「ああ遥かなり　少戦校時代の思い出の一コマ」『若獅子』四二、二〇〇三年一月。

(83) 犬上幸夫「航空兵と戦車兵と」『若獅子』四四、二〇〇五年一月。

(84) 前掲「ルポ上井出陸軍少年戦車兵学校」三〇頁。

(85) 前掲『富士とともに　第五期生のあゆみ』三八・三九頁。高橋文一「少戦校の思い出」『若獅子』五〇、二〇一一年一月。

(86) 前掲「自分史　私は少戦校を誇りに生きた」。千葉幸「三期生大地生徒の慰霊碑参拝と富士一周」『若獅子』四九、二〇一〇年一月。死者二名とするものもある。前掲「ルポ上井出陸軍少年戦車兵学校」二九頁。

(87) 西田進『少年戦車兵物語』近代文芸社、一九九四年、九七～九九頁。

(88)『陸軍軍事施設調書』（防衛省防衛研究所図書館所蔵）。昭和二〇年三月三日付陸軍一般あて陸軍大臣通牒「陸密第七四九号陸軍演習場規則中改正ノ件達」『昭和二十年　陸密綴』（防衛省防衛研究所図書館所蔵）。ただし、同史料は西富士演習場の所在地について、山梨県南都留郡のほかに静岡県「駿東郡」としており、この部分については明確な誤りとしなくてはならない。

(89) 昭和一五年五月二四日付陸軍大臣あて教育総監通牒「教密第七二四号砲兵ノ超過射撃実施ノ件」『陸軍省密大日記』昭和一五年第一二冊（防衛省防衛研究所図書館所蔵）。

(90)『日本陸軍実施学校及其の他陸軍諸学校に関する出問書に対する第二次回答別冊』（防衛省防衛研究所図書館所蔵）参照。

(91) 前掲「陸軍少年戦車兵学校顛末」七三頁。

(92) 昭和一五年六月八日付陸軍大臣宛満州派遣留守第一師団経理部長報告「西富士演習場買収完了報告」『陸軍省大日記　昭和十五年　乙輯　第二類　第一冊』（防衛省防衛研究所図書館所蔵）。前掲『静岡県戦後開拓史』三七一頁。

(93) 前掲『富士宮市史』下、九九一頁。
(94) 藤田実彦『少年戦車兵』目黒書店、一九四二年。
(95) 佐藤隆秀『少年戦車兵志願読本』日本兵書出版、一九四三年。
(96) 船山馨『裾野』皇民社、一九四三年。
(97) 竹内卓樹『少年戦車兵となるには』泰光堂、一九四三年。
(98) 同前、三〜一〇頁。
(99) 長谷川浩一「故原田軍曹のこと」『若獅子』四八、二〇〇九年一月。
(100) 本間楽寛『少年戦車兵魂――壮烈原田敬一伍長』錦城出版社、一九四二年。
(101) 「精進一途の陸軍少年兵」『写真週報』三一二、一九四四年三月。『写真週報』三四一、一九四四年一〇月、表紙、等。
(102) 『朝日新聞』昭和一九年五月一日第一面「堂々の鉄の軍列　戦車部隊帝都行進」。
(103) 『朝日新聞』昭和一八年一一月一二日第三面「陸軍少年兵召募講演会」。
(104) 「一日入営の豆戦車隊　富士山麓」『写真週報』二四六、一九四二年一一月。
(105) 前掲『岳麓　富士とともに』八八頁。
(106) 『軍神西住戦車長　支那事変少年軍談』大日本雄弁会講談社、一九三九年。以下、刊行年はいずれも一九三九年。久米元一『昭和の軍神　西住戦車長』金の星社。久米元一（伊藤幾久造　絵）『軍神西住大尉』大日本雄弁会講談社。中島亦雄『軍神西住大尉と母校御船中学』熊本県立御船中学校。
(107) 朱通祥男編『日本劇映画総目録――明治32年から昭和20年まで』日外アソシエーツ、二〇〇八年、八九八頁。
(108) 服部裕子「子ども向け伝記『西住戦車長』論――軍神の形成と作品の特質――」『愛知教育大学大学院国語研究』一九、二〇一一年三月、二二頁。
(109) 司馬遼太郎は、「軍神」について、「もっとも安あがりの軍需資源」としている。司馬遼太郎『歴史と小説』集英社、一九七九年、二五八頁。もちろん、少戦校を志願した少年達にとって、西住戦車長が全く思考の範囲外の人物だったわけはでは無いと思われる。牛山才太郎「軍神西住戦車長のことなど」若獅子会手記編集委員会編『手記　少年戦車兵』。

(110)『静岡新聞』昭和一九年三月九日第二面広告。『新潟日報』昭和一九年三月一五日第四面広告。
(111)前掲『手記　少年戦車兵』四〇頁。
(112)大内秀邦『少年戦車兵』宋栄堂、一九四三年。映画については筆者未見。
(113)前掲『岳麓　富士とともに』八八頁。
(114)『朝日新聞』昭和一八年一二月五日第三面「少国民総決起大会　続け陸軍少年兵」。
(115)『朝日新聞』昭和一八年一二月一三日第二面「若桜部隊逞しき練武　続け陸軍少年兵　少国民総決起大会」。
(116)『朝日新聞』昭和一八年一二月一一日夕刊第二面「兄さん少年兵迎え気負い立つ少国民」。
(117)奥義輝『富士に誓う　陸軍少年戦車兵学校生徒応募宣伝活動に参加して』一九九八年、一六～二三頁。
(118)『朝日新聞』昭和一八年一二月一九日第三面「青葉城下に歓呼沸く　少国民総決起大会の開幕」。『朝日新聞』昭和一八年一二月二〇日第二面「東北健児起つ」。
(119)前掲「少年戦車兵学校のあゆみ」二二頁。
(120)『少年戦車兵学校の生活』六九頁。
(121)前掲『富士に誓う　陸軍少年戦車兵学校生徒応募宣伝活動に参加して』一八頁。
(122)前掲『少年戦車兵学校の生活』一四八頁。
(123)前掲「『我が学校』のご紹介」。
(124)前掲『岳麓（その二）』七頁。玉田校長は個人的にも富士山に関心を持ち、富士宮市内で開かれた絵画展で既に売約済みだった富士山を描いた油絵を賞揚し、後日、買い手から、彼個人か少戦校へかは不明であるが、その絵の寄贈をうけている。『静岡新聞』昭和一九年一月一一日朝刊第四面「〝富士に誓う〟玉田将軍喜ばす　油絵展の一挿話」。
(125)前掲『少年戦車兵学校の生活』二八頁。
(126)前掲「少戦校の思い出」。
(127)前掲『少年戦車兵学校の生活』三二～三三頁。
(128)立花収蔵「十九歳の伍長ドノ」前掲『別冊　一億人の昭和史　陸軍少年兵』。

(129) 前掲『富士に誓う　少年戦車兵第五期生の歩み（第1集）』一一頁。
(130) 前掲『手記　少年戦車兵』五二頁。
(131) 「少年戦車兵から故郷へのお便り」『若桜』一―二、一九四四年六月、二四・二五頁。
(132) 前掲「ルポ上井出陸軍少年戦車兵学校」二九頁。前掲「少年兵の母校　巣立った四千の若獅子――第一期から〝繰上げ〟前線へ」一二二頁。
(133) 『若桜』一―四、一九四四年八月、二九頁。
(134) これらの歌詞については、少戦校第三期生の吉留一利氏より御教示賜った。
(135) 前掲『少年戦車兵物語』五五頁。
(136) 幹田巌「富嶽と我が余生」『若獅子』四三、二〇〇四年一月。
(137) 以下は、前出の吉留氏の少戦校にかかわる回想である。本記録は二〇一四年一〇月二一日、静岡県富士宮市上井出の旧陸軍少年戦車兵学校跡地に建つ若獅子神社において、山梨学院大学法学部教授松本武彦の求めに応じ、吉留一利氏が語ったものを、同氏の略歴も含め、吉留氏の校閲を得て松本が文章化したものである。

吉留一利氏略歴

大正十四（一九二五）年三月十五日、宮崎県西諸縣郡小林町（現在小林市）生まれ。昭和十八年十一月十日、陸軍少年戦車兵学校卒業の「第三期生」。蒙古方面、河南作戦、湘桂南作戦参加。

大東亜戦争終戦となるも、現地（通州）で中国国民党軍将校の戦車教育に従事。復員後宮崎県開拓協会機械隊の臨時職員、九州ブルドーザ会社などを経て、建設省職員となり、昭和三十八年東京都小平市の建設省建設研修所、静岡県富士宮市根原の建設省建設大学校中央訓練所（静岡朝霧校）の指導員、教官、として勤務。昭和三十八年、静岡県富士宮市上井出に転居。

昭和四十年陸軍少年戦車兵学校跡地に少年戦車兵戦没者慰霊顕彰の為に若獅の塔を建立し、帰還戦車の奉納安置、若獅子神社の創建となり、若獅子神社の祭事、護持管理に奉仕し現在に至る。

陸軍少年戦車兵学校と私

吉留一利

私は、宮崎県の小林市の農家に、九人兄弟の二男として生まれました。少年戦車兵を応募したのは、小林市から少年戦車兵の第二期生として入校された方も居て安心感があり、募集のポスターなども見て志願しました。父親からも反対されず、寧ろ頑張る様励まされました。

入学試験があり、私の場合は都城聯隊区で受験しました。一次試験は学科と身体検査、二次試験は体力検査や適正試験などが実施されました。

私は高等小学校卒業後、青年学校在籍中に受験し、昭和十六年十二月一日、千葉市黒砂町（現　稲毛区穴川）の陸軍少年戦車兵学校に入校しました。この学校は、同地の千葉陸軍戦車学校の生徒隊として昭和十四年に勅令第四八五號により設立されたのが前身で、昭和十六年に勅令一〇一五號により陸軍少年戦車兵学校となりました。

私達は、少年戦車兵の第三期生です。

入校すると、当時の中学校二年を修了した人から高等小学校を卒業の人等様々でした。二年の教育訓練の課程で普通学、軍事学と戦車の操縦や整備の実習、射撃、通信等の戦技の教育訓練、体育、武道等、毒ガスを使った訓練等もあり、海水浴や富士登山も行われました。

教育訓練を受けながら、他の少年兵学校と同様給与が支給され、その額は月四円でした。昭和十八年十一月十日に卒業しました。在校中の二年間で身長が一〇センチメートルも伸びたのが印象に残りました。

入校したのは千葉市でしたが、昭和十七年八月一日に、静岡県の富士郡上井出村に陸軍少年戦車兵学校が設立され転校、移転、富士山麓で戦車兵としての知識、技術、戦技、技能を教育訓練する事になりました。

富士山については、校歌にも詠われていましたし、神聖な山だと理解していました。しかし、私の出身地の宮崎県は、日本民族の故郷とも言える高千穂の峰がありましたから、私個人としてはやみくもに遥拝すると言った感じは無かったように思います。

卒業式は昭和十八年十一月十日、式典終了後富士宮市の富士浅間大社に参拝し戦地に向いました。

教育訓練の課程を終えて卒業と共に同期生二八名が戦車隊の下士官勤務を命ぜられ、蒙古の機甲第四師団戦車第十三聯隊に配属され、のちに陸軍軍曹に昇進しました。配属された戦車第十三聯隊は、戦車は部隊にあり、私自身戦車の操縦に関心を持ち、

小隊長車の操縦手を命ぜられました。

河南作戦、湘桂作戦に参加して作戦移動中鄭州で終戦となりました。

聯隊本部は北京郊外の豊台に昭和二十年十月末に同地で武装解除を受け、戦車は通州に移動し回送しました。

通州では、中国国民党の将校に戦車教育を行うよう求められ、国民党軍の命により、日本留学の経験のある中国人が通訳をつとめ、国民党軍の戦車部隊の育成、教育に六ヵ月間従事し、昭和二十一年五月復員し帰国しました。

復員して、郷里の自宅でしばらく農業に従事し父親の手伝いをしていましたが、戦車や自動車の操縦や修理技術をかわれて、宮崎県が組織した霧島山麓の開拓協会、機械隊の開墾事業の運転、修理の業務に従事しました。

その後、宮崎県土木部に米軍よりD7ブルドーザが払い下げになりましたが、運転や整備をする人がいなくて、協力しましたが建設機械について勉強したらどうかと紹介があり、福岡市の建設機械運営会に研修に行き、働きながら知識技術の習得に努力しました。

そして福岡県や佐賀県武雄市の道路拡幅工事に従事し、九州ブルドーザ会社に就職し、道路や河川の改修、築堤工事等にも参加しました。

昭和二十五年建設省の九州地方建設局久留米機械整備事務所に派遣社員として勤務して、建設機械の操縦、修理や派遣施工等に従事しました。

昭和二十七年三月結婚し、久留米に転居しました。

昭和三十八年、建設省付属機関である建設研修所に配置転換となり、ブラジル移住、移民となる産業開発青年隊の教育訓練の指導員となりました。更に、昭和三十九年四月に転勤を命ぜられ、富士宮市根原の建設大学校中央訓練所（後、静岡朝霧校）に赴任し、産業開発青年隊の教育訓練の指導員、教官として定年退職するまで技術指導の教育訓練に勤務しました。

昭和三十八年には、富士宮市内に居住移転しました。

昭和四十年十二月には旧陸軍少年戦車兵学校の跡地に、若獅子の塔の建立、昭和五十年八月には大東亜戦争玉砕の島サイパン島より帰還戦車の奉納安置、昭和五十九年十月には若獅子神社の創建、昭和六十年十二月には宗教法人若獅子神社と承認されました。

私達の青春は、義務教育は教育勅語で、軍人は軍人勅諭で教育訓練を受け、国家の為、大和民族の為、家族兄弟の為と勉学に努め、東洋平和を目指して、同じ目的を持って戦場に赴きました。幸いに生きて帰れたのは、戦没者のお陰で生かされているとそう思って慰霊顕彰と感謝の気持ちで、戦時中の事は忘れられず、現在は「感謝、報恩」の生活をしております。

戦時中は、父母に手紙を書く事も儘ならず、また、父母からも一通の手紙も届きませんでした。だからという訳ではありませんが、手紙に必要な「郵便切手」にはとても愛着があり、切手の収集、使用古切手にも興味があり、私の唯一の趣味であります。

この回想によれば、宮崎県出身の吉留氏は、富士山に匹敵する聖山高千穂の峰に親しんでいたため、富士山の存在に対し比較的冷静な認識がなされていたようだ。

(138) 前掲『少年戦車兵物語』六七～六九頁。前掲「少戦校入校前後の思い出」。
(139) 前掲『少年戦車兵物語』七〇頁。
(140) 前掲「少年兵の母校　巣立った四千の若獅子――第一期から〝繰上げ〟前線へ」一二一頁。
(141) 村瀬隆彦「陸軍少年戦車兵学校跡の戦車」静岡県戦争遺跡研究会編『静岡県の戦争遺跡を歩く』静岡新聞社、二〇〇九年、一二六頁。前掲『少年戦車兵物語』九頁。
(142) 前掲『富士宮市史』下、九九八頁。ただし、吉留氏のご教示によれば、在籍者・戦死者ともにより多数であるという。
(143) 前掲『手記少年戦車兵』二九七～二九九頁。
(144) 前掲『富士とともに』一二八頁。
(145) 同前、三七頁。
(146) 千葉幸「『少年戦車兵での思い出』随筆集」『若獅子』五〇、二〇一一年一月、四七～四八頁。
(147) 松田禎之「暁第二九四〇部隊跡記念碑を訪ねて」『若獅子』四三、二〇〇四年一月。
(148) 前掲『日本の機甲六〇年』二五二頁。
(149) 前掲『陸軍少年戦車兵学校状況説明書　昭和二十年九月五日』。これらのほかに、一期生・二期生の卒業生のうち二七名が生徒隊附の「助教」として後輩たちを指導していた。前掲『富士とともに』三七頁。

(150) 前掲「終戦の思い出」。前掲「富士に響く爆音こそ少年戦車兵の子守唄」二三四頁。桂小金治『ケラの水渡り』報知新聞社、一九六七年、四五頁。前掲「終戦の思い出」。
(151) 前掲『ルポ上井出陸軍少年戦車兵学校』三〇頁。
(152) 前掲「富士に響く爆音こそ少年戦車兵の子守唄」二三四頁。前掲「終戦の思い出」。桂小金治「僕の父親――厳しさと思いやりの子育て――」『青少年問題』四九―一一、二〇〇二年一一月、七頁。
(153) 犬上幸夫「少戦校反省日記を省みて」『若獅子』四六、二〇〇七年一月。前掲「終戦の思い出」。
(154) 木川田庸夫「終戦当時の思い出」前掲『手記少年戦車兵』。
(155) 同前。
(156) 同前。前掲『富士とともに』三九頁。
(157) 同前。
(158) 前掲「終戦当時の思い出」。前掲『富士とともに』三九頁。
(159) 前掲「ルポ上井出陸軍少年戦車兵学校」二八頁。

付記

本稿執筆にあたり、少戦校三期生の吉留一利氏、静岡新聞社社会部記者佐藤章弘氏よりご指導賜った。ここに記し、深甚なる謝意を表します。